

# 追悼

## 追悼～吉住千亜紀さんを偲んで

尾久土正己（和歌山大学）

### 1. はじめに

2021年7月14日、本研究会の会員で編集委員として活躍されていた吉住千亜紀さんが、約8ヶ月の入院闘病の末、52歳の若さで天国に旅立たれました。本投稿は、共同研究者として多くの時間を共に過ごしてきた著者が彼女のご冥福を祈り書いた追悼文です。

吉住さんは、徳島県出身で、愛媛大学理学部卒業後、大手重工メーカー勤務などを経て、那賀川町（現阿南市）科学センター、徳島県立あすたむらんど、和歌山大学、飯田市美術博物館で天文教育とプラネタリウムを使ったドーム映像の研究で多くの業績を残されています。本文では、特にドーム映像の研究面から吉住さんを紹介したいと思います。

### 2. あすたむらんど時代

徳島県立あすたむらんどは、科学館やプラネタリウムを有する児童公園で、吉住さんは7年間、ここで主に、プラネタリウムの解説とオリジナル番組の制作をされていました。オリジナル番組の制作では、イラストレーターのKAGAYA氏にいち早く注目し、同氏のイラストを使ったプラネタリウム番組をシリーズで制作されました。現在、我が国を代表するプラネタリウム映像クリエイターとして活躍されている同氏は訃報を知って、「吉住さんはわたしの作品を押し上げてくださった恩人」と著者にメールをいただいています。また、小惑星探査機「はやぶさ」では、まだ探査機が世間からあまり注目されていなかったイトカワ到着前の2005年に、スペースアクトクリエイターの池下章裕さんとJAZZピアニストの甲斐恵美子の音楽を組み合わせ、「ボクノチイサナオホシサマ」を制作されました。

この番組がきっかけになり2007年、JAXAの小惑星探査機「はやぶさ」物語「祈り」のDVD制作で構成・台本を担当されました。この作品は、2008年5月にドイツで開催されたWorld Media Festivalで銀賞を受賞しましたが、両作とも当時はまだ珍しかった探査機を擬人化し一人称の旅物語にするなど、科学番組に新しい表現方法を確認されました。

### 3. 和歌山大学時代

和歌山大学では2008年の観光学部設置に機にドームスクリーンを星空だけでなく、様々な360度の実写映像を投影する観光デジタルドームシアターを導入しました。その際、ドームコンテンツを制作できるスタッフとして吉住さんに白羽の矢を立て、海を越えて徳島県から和歌山県へ着任してもらいました。

まだ、4K映像が最先端の映像機器であった時期であったため、撮影から投影まですべての立ち上げに活躍していただきました。内外で様々な被写体を撮影してもらいましたが、当時のカメラはカメラにはファインダーも記録装置もなく、レコーダーだけで30kg近い大きなものでした。国内では、業務用のハイエースを乗りこなし、海外出張でも小さな身体で多くの機材を運んでくれました。どの現場でも彼女が大きな撮影機材を設置して被写体に向かう姿はプロそのものでした。

吉住さんが和歌山大学時代に残した大きな業績は、飯田市美術博物館のオリジナル番組の制作（20本のうち17本が和歌山大学時代に制作）、東日本大震災の被災地の記録（吉住さんが代表で科研費基盤研究(C)を獲得）、そして、東京オリンピックでのドーム映像を使った臨場感中継の基盤的研究でした。特にオ

オリンピックの臨場感中継では、著者に代わって、都内でプレゼンしてくれたことがきっかけで組織委員会の目に留まり、実際のオリンピック大会で実装されました。飯田のプラネタリウムも中継地点になっていましたので、元気なら彼女が中心になって準備と投影を担当するはずでした。代わりに著者が準備をしながら、吉住さんにスマホのメッセージで進捗を報告していましたが、直前の7月11日の中継実験成功のメッセージに返事がないことを心配していました。

天文教育の関係者の皆さんが見ていた吉住さんは基本的に天文関係の仕事だったかと思いますが、和歌山大学では、宇宙はもちろん、歴史・民俗、美術、自然、観光と、どんなテーマであっても目を輝かせて取り組んでいました。仕事柄、様々なジャンルのドーム映像を見ているのですが、吉住さんの作る映像は、カメラの撮影から編集まで、常に第一人者であったと感じています。徳島から和歌山を経て飯田時代まで、吉住さんが制作した番組のほとんどのサウンド編集を担当された山本雅之氏は訃報を聞いて、「ご一緒させていただいたどの作品にも、吉住さん独特の世界観があり、物語がありました。それを音でどう具現化させていくか、毎回毎回、一緒に悩みに悩んだことをとても懐かしく思い出します。」と著者にメールを送ってこられました。

#### 4. 飯田市美術博物館時代

和歌山大学から飯田市美術博物館に移られたあとは、プラネタリウム担当として、再び天文教育を中心に活躍されました。ドーム映像の研究では引き続き、大学の客員フェローとして共同研究を続けてきましたが、博物館での活躍については、博物館の村松武氏、飯田御月見天文同好会の奥村茂実氏から聞き取った内容をもとに紹介させていただきます。

飯田市には、航空宇宙産業に関わる企業が

あることを生かして市をあげて「飯田・宇宙教育」が展開されていますが、その中心として吉住さんが活躍されました。日々のプラネタリウムの解説、博物館での展示に加えて、「宇宙留学サマーキャンプ」・「天竜川総合学習館での天体観察講座」などの企画運営のほか、飯田天文ネットワークを結成し、事務局として、地域の天文教育の中心となって活躍されていました。広域では、「長野県天文愛好者連絡会」の活動にも積極的に参加され、地域における天文教育の発展に寄与されました。これらの地域の天文教育においても、吉住さんの独特の感性で取り組まれ、多くのファンを作られていました。飯田市で共に普及活動をされていた奥村氏からは、「私にとって吉住さんは宇宙に浮かんだ大きな船のようなもので、安心してその船に航路を任せ、その船から星を見ることができ、そんな存在だった。」と著者にメッセージをいただいています。

#### 5. おわりに

著者が吉住さんとした最後の仕事は鹿児島県与論島の観光ドーム映像でした。2020年10月1日に与論島で行われた国の重要無形民俗文化財「与論十五夜踊り」を単身で撮影してもらい、その2週間後に和歌山大学で編集作業と一緒にしました。飯田に帰宅する日がちょうど吉住さんの誕生日だったこともあり、大学の近所のレストランでお祝いの食事をしました。その際、「このあと、ちょっと難しい病気なので長い入院になるかもしれない」と語っていました。対面で話ができただけはこの日が最後になりました。オリンピック映像の中継初日、著者は飯田のプラネタリウムで見学しましたが、開会式やバレーボールの試合の圧倒的な臨場感に感激し、横にいないことに涙しました。ドーム映像の研究ではこの秋、初めて博士も誕生しました。色々、本当にありがとうございました。